

# 〈屋根裏〉だけの恋人

——宇野浩二「屋根裏の恋人」論

## 1 序論

宇野浩二「屋根裏の恋人」は『改造』第四卷一号（改造社、大正十一年一月）に掲載され、後に『屋根裏の恋人』（金星堂名作叢書十九）（金星堂、大正十一年六月）に収録された作品である。

この作品は、新聞記者の山村廣吉が隣室に住む赤野又造という男の「妹」を名乗る常子と恋人になるも、常子が赤野の「妹」ではないこと、赤野と常子が肉体関係をもっていること、常子が「穢多」の出自であることを知り、彼女を棄てるかこれまでの関係を維持するか逡巡する物語である。

ただし、これまで本作を精緻に読み解いた先行研究はない。同時代評も、「あれはい、ものであつた。女のことをすなほに書けば誰にでもい、ものが出来ると見える」とした堀木克三の評価以外には、「主題としてこれほど迄にシヨツキングなものは、今の文壇にも余り見当たらない」にも拘らず「一向に私の胸を打たない」とした藤森淳三、そして、「ゴオリが露西亞庶民階級に對

宇佐川奏子

して灌いだ燃えるやうな愛の力は、宇野氏には全然欠けて」おり「僕等の胸に共鳴しない」と述べた鳳逸平の批判的な意見が見られるだけで、肯定的な批評は殆どない。確かに、主人公の山村は新聞記者でありながら現実の社会問題に何の興味も持たず、与えられた仕事すら怠けている。労働争議を取材しても、その様子を傍観視するばかりである。彼にとつての仕事とは、よい記事を書いて給料をもらうことであり、自社の新聞に目を通すことさえしない。

こうした主人公の態度は、この作品の語りofのスタンスでもある。本作には被差別部落出身の女が登場し、その出自が「恋」の行方に暗雲を漂わせるような描き方がなされているが、それを社会問題として告発したり、日本社会における差別のありようを深く掘り下げてその構造を明らかにしたりしようとはしていない。「穢多」という表現まで見られるが、本作はこうした差別問題の是非に踏み込まず、他者にレッテルを貼ること、いわれのない氏素性で他者を差別することで自らの欲望を充たそうとする人間の本性を映し出す道具立ての一つとして機能させている。それは社会的

な差別問題としてではなく、常子という女に付着し浸透してしまっている一種の滲みのようなものとして認識されており、恋人の身体にそれを見出した男の独善的な振る舞いに焦点があてられているのである。

それを効果的に演出するために、語り手は〈屋根裏〉という空間を寓意として用いている。狭い下宿の「襖」や「階段」、「窓」といった舞台装置も利用している。そこに現前しているのは、自らの妄想を他者の身体に投影することで満足感を得ようとする生々しい欲望のあり方であり、それが〈屋根裏〉という寓意と深く結びついていく過程そのものである。

これらを踏まえ、本稿では作品タイトルにも含まれている〈屋根裏〉を論の主軸に据える。作者・宇野浩二には本作の他に、空想と眠りに日々を浪費する男を主人公とする「屋根裏の法学士」（大正七年）があり、孤独な二人の少女を描いた吉屋信子の「屋根裏の二処女」（大正八年）、〈屋根裏〉から他人の部屋を窺視する魅力に取り憑かれた男を描く江戸川乱歩の「屋根裏の散歩者」（大正十四年）をはじめ、大正期の日本文学には特殊な領域としての〈屋根裏〉が頻出する。妄想の中に生きる主人公や、孤独な主人公たちが身を潜める異空間である。「屋根裏の恋人」は、そうした諸作品とモチーフを共有しつつ、さらに人間の内面としての〈屋根裏〉をも表象させている点において重要な作品である。本稿では、そうした点を踏まえながら作品を精緻に読み解いていきたい。

## 2 妄想する主人公、山村廣吉

序論でも述べたように、本作は主人公の振る舞いに焦点を当てている。〈屋根裏〉について論じる前に、まずは主人公山村廣吉の言動を追っていく。

「屋根裏の恋人」は、新聞記者の山村廣吉が冬の訪れに哀愁を感じている場面から始まる。「何を聞くでもなく、又何を考へるでもなく、唯ぼんやり」と頰杖を突く山村は、日頃軽蔑している同僚にさえ弱音を吐き、自分は「優しい心」を持ちながら妻もいないし「恋」もないと語る。会社を引けたあとも、「毎晩遅くまで彼方此方とぶらついて」、深夜に帰宅するのが常となっている。山村の下宿は「場末の荒物屋の家の二階」である。部屋のなかには「十燭の電燈と、形ばかりの机と、小さな組立本棚と、十冊余りの雑誌と書物」があるばかりで、他は何もない。自分の味気ない生活に憂鬱になりながら退社した山村は、「貧乏人の私生児として生れ」、「金持に学資を支給せられて、やうやう中学を卒業した」自分の来歴を振り返りながら、「果して自分の欲してゐるもの」は妻や家庭なのだろうか？ と考えて「憂鬱」になる。彼は部屋にある書物を読むこともないし、親しく言葉を交わす知己もいない。隣室には赤野という「もう四十歳に近い」「独身者」が棲んでいるが、「この世の中で最も近くに住み合ひながら、今だに碌に言葉を交したこともなく、又顔さへ会はずことも滅多になし」の関係を続けている。彼には「恋」だけでなく友も趣味もないのである。

「憂鬱」な彼の生活に束の間の慰安を与えてくれるのが「客たちの話」と、煙草の煙と、埃とが一つになつて、もや／＼と部屋の中に立ちこめてゐる」カフエーである。ある日、町を歩いていたら彼は質屋に入っていた「銘仙の袷」のことを思い出し、「カーツと大声で呶鳴つて見たい程、絶望的な感じ」に襲われる。「冬服」を持たないまま、いつまでも「洋服でごまかしてゐる」わけにはいかないという気持ちになる。ポケットのなかに残つてゐる金高を胸算用しながら、いつも立ち寄るカフエーの扉を押した彼は、その猥雑さのなかに身を沈めた瞬間、「先までとは別人のやうな陽気な気分」になつて給仕女を物色し始める。「よし、誰でもいい、明日から、最初に自分の手近に見付けた女を、俺は詳細に見詰めることだ、そして一所懸命にその女の美を探すことにしよう。」という気持ちまで起こす。

こうした描写を通して浮かびあがるのは、仕事にも生活にも張り合いを持たず、独り身の侘しさを「ごまかし」ながら日々を過ごす山村の屈折した自意識である。「もや／＼」とした空間に逃避することで殺伐とした現実を忘れてしまおうとする身勝手な心性だ。この場面の直後には、

——今や、世の中のあらゆる片隅に、彼が恋することを、例へばあの吉原の女たちのやうに、煙管に火をつけて待ち焦れてゐる女がゐるやうな気がして来た。(それは女学生か、人妻か、未亡人か、商売女か、或ひは黒んぼか……?)そして彼女等は、たゞ山村廣吉に見出してもらふ為にのみ、それ／＼彼女等自身の美を、他の誰にも見せないで、そつと隠してゐ

るやうに思はれて来た。

という内面描写があり、妄想を膨らませた山村が「悉く愉快極まる」やうな気分になつて「時は今、恋を語るべき秋である、」といふ詩を作らう」と考へる場面があるが、これは彼の人間性を端的に物語つてゐる。彼にとつて重要なのはそのときどきの気分であり、「恋」も自尊心を気持ちよく刺激してくれる道具立てとして必要とされているのである。

妄想と現実の狭間を揺れ動く山村は、妄想したやうな女が現実に現れない原因を色々と考えてみるが、「機会に恵まれない為だ」と結論づけて、何も行動を起こさうとしない。妄想と現実のギャップには苦しむが、それが自身に因るものとは思わない。また、親の目を盗んで都会に出て来たと言ふ常子を「いや、面白いです」、「新時代の婦人の誰も経験することです」と言つて煽てたり、社会部長に労働争議の取材を頼まれたとき、「いや、面白いです、ね、それは面白い」と返事したりしていることから分かるやうに、山村は「何が面白いのやら、自分でも分らない」ときに限つて「面白い」を連発する。興味のない話題に対して無関心な態度をするのではなく、むしろ自分の感情に逆行するやうな言葉でやり過ごさうとするのが山村のやり方なのである。

その場を取り繕うだけで内省しない姿勢は、新聞記者としての山村に顕著に見られる。彼には、所轄の警察署に立寄つて夕刊の記事になりそうなネタを探さず仕事があるが、毎朝、十時を過ぎた頃に目を醒ますやうな生活をしているため、だんだんその日課にも辟易し、社会部長に適当な嘘をつくやうになつてゐる。もし自

分がまともな聞き込みすらしていないことが暴露したらという「不安」に慄きつつも、まともに働こうという気にはなれずにいる。彼の頭のなかでは、相変わらず「銘仙の裕や、冬の洋服や……そしてカフェー、そして女、そして恋……」が意味もなく駆け巡っている。

ある日、冬服と裕を質受けして珍しく幸福な気分浸って帰宅した山村は、隣室から若い女の声が漏れてくるのを聞く。眠りに就けない夜を過ごした翌日、彼は下宿の女房と女が会話している場に出くわし、その女が二十五歳であること、常子という名であることを知る。「殆ど唾かと思はれるほど、無口な男」である赤野のところに、なぜこのような若い女が居るのかを訝しく思った山村は、襖一枚隔てただけの隣室に耳をそばだて、二人の話し声を盗み聞きするようになる。下宿屋の女房が「この方は、あの赤野さんのお妹さんで、」と紹介したことで、常子をひとりの女として意識し始める。

ここで興味深いのは、語り手が山村の常子との向き合い方を微細に描き分けていることである。彼の目に映る常子は、「俯向いてゐる」ときの方が魅力的である。相手と「真正面」に対峙すると「やつぱり余り美しくもないな」という失望を感じてしまうが、こちらが一方的に「盗み見」ているときには煽情的な気分が高まる。また、直接、常子と会話をするときには「不思議なほど落着いて」「殆ど無感動な態度」で接することができるが、ひとたび自室に戻って彼女のことを想像すると、いたたまれないような「煩悶」が訪れる。

また、常子と知り合ってから山村は、自分が出社するとき赤

野が部屋に居るだけで何故「赤野が今頃まで家にゐたのだらう」と考え、拳句の果てには「常子、常子、俺は常子と是非恋をしよう、……」と決意してみたりする。××工場へ取材に行った帰りには、「堪らなく常子が恋しくなり」「どうしても彼女を愛しないではゐられない」気持ちになるが、その一方で、下宿の女房から「赤野さんは、いつものやうに留守だから、今のうちにあの人を口説いてごらん！」とけしかけられると、「躍るやうなわく／＼した心」を感じながらも「何とも一種説明し難い、ちぐはぐな感じ」に囚われる。一目見たとき「これは美しい」と感じた常子に対しても、「これは決して気持の悪い女ぢやない、背も高いし、鼻も顔もい、恰好なのに……それでは何処が悪くて、何処にどういふ欠点がある為に、彼女は非常な美人にならないのか知ら？」などと取止めのないことを考えたりしている。

そこには現実と妄想を切り替えるスイッチが作動している。常子との「恋」を成就させたいと願いつつ、相手の思惑で物事が進んでいくこと、彼女に溺れて自分が危うい立場になることだけは避けようとしている。洋服を着ているときには冬物の「銘仙の裕」の暖かさが懐かしくなり、生活に困ったらその「銘仙の裕」を質屋に入れて僅かな金に換えてしまうのと同様、彼は常に彼女を自分に都合よく扱いたいと考えているのである。

山村は妄想する主体として描かれるが、その妄想と彼の気分に影響を与えるものとして、「煙」と「寝床」がある。山村はモヤがかかっている空間に逃げ込むことで気分を転換している。絶望的な気持ちでカフェーに飛び込んだ彼が、室内の「もや／＼」とした空気に触れることで「何も彼も忘れて」「陽気な気分」に

なつたこと、あるいは、労働争議の取材に行った彼が「埃と煤煙とが多くなつた中」を進むうちに邪念が消えて仕事に集中できる気がしてくることなどが明らかにしているように、彼は「埃」や「煤煙」が立ち込める「もや／＼」とした世界を経由することで、それまで自分を支配してきた不快な気分を忘れることができるのである。「寢床」は彼の妄想を必要以上に掻き立てる装置として機能している。隣室にいる常子の声を漏れ聞いた山村は、「頭から深く夜着を被」つてその声を振り払おうとするが、「女の幻影」はますます彼のなかで鮮明になり眠りを妨げる。常子と別れたいと思つていても、ひとたび寢床にもぐりこむと「今更のやうに常子のことが考へられ」「常子と結婚しよう」と考えたりもする。赤野と常子の関係を知つて激昂した際には、寢床の中で常子をどう苛めるか考えながら夜明けを待つ。

それに対して、作品内における山村の行動を追うと、冬服である「銘仙の袴」と秋口まで着ている洋服が「浮世」の象徴となつていることに気付く。たとえば、冬服を質受してきた山村は「珍らしく幸福な気持」になり、それまで身に着けていた洋服を脱ぎ「銘仙の袴」に着替える。その途端、隣室から女の声が聞こえてきて彼の「心持の統一」は失われる。また、作品の収束部で隣室から漏れ聞こえる声に耳を聳てた山村は、常子と赤野が兄妹ではなかつたことを知り打ちのめされるが、ここでの彼は洋服を着たまま寢床に潜っている。二つの衣服は、彼が厳しい現実と直面するとき、象徴的に描かれるものである。妄想を掻き立てられる場であるはずの寢床の中に洋服のまま潜っていることに気が付いた山村は笑い出し、その笑いは「終の方で泣き声」になつてつ

いには「目の方から涙がにじみ出すやうに出て」きてしまう。ス イッチで切り替えられていたはずの妄想が、現実に浸食された瞬間であつた。

### 3 二重底の〈屋根裏〉

こうした山村の妄想を具現化する空間として表象されるのが〈屋根裏〉である。さきにも述べた通り、山村たちが暮らす部屋は「場末の荒物屋の家の二階」にあるが、語り手はそれを〈屋根裏〉と呼ぶ。本文の記述を追っていくと、山村が実際に移動しているときには「二階の自分の部屋に駆け上る」、「二階の自分の部屋に帰つて行つた」と語られる。ところが、常子の居る場所として部屋の中の様子が想像されるとき、語り手はそれを〈屋根裏〉と記述するのである。作品内には〈屋根裏〉という表現が三方所登場するので、以下、それぞれの描写を追つてみよう。

(1) 彼はあの陋屋の屋根裏に、しょんぼりと物思に沈んでゐる、彼女を想像すると、あの煤けた、方々破れた襖も、あのさ、らのやうに擦り切れた畳も、机も、土鍋も、悉く彼女がある為に明るく、楽しいやうに考へられた、さうだ、そして自分のやうなものは、自分のやうなものを、慰めてくれる人は、常子のやうな女性でなければならぬ、……

(2) 殊に、こんな埃だらけの屋根裏で行はれる恋に、優しい心なんて言ふものが何の役に立つものか

(3) 殆ど毎日のやうに口喧嘩をして、そしてそれが埃だらけの、屋根裏の部屋の片隅で、どういふ事に依つて結末が付くかと考へた時、彼は自分自身も、又常子の魅力も、一切が一時に醜悪で憎々しく思はれて、堪らなくなるのであつた。

それぞれの場面を参照すると、常子のいる〈屋根裏〉は「煤けた」「埃だらけの」といった表現と密接に結びつきながら使用されていることが分かる。「二階」が単なる空間を指し示す言葉であるのに対して、〈屋根裏〉は鬱々とした汚れイメージが固着している。また、前後に「しょんぼりと物思に沈んでゐる」、「優しい心なんて言ふものが何の役に立つものか」、「醜悪で憎々しく思はれて、堪らなくなるのであつた」といった表現が付随していることから分かるように、〈屋根裏〉は人間の心の闇、あるいは、沈殿した負の感情とも結びついている。もちろん、〈屋根裏〉はただの汚れた世界というわけではなく、常子がいることで「楽しいやうに考へられ」ところでもある。つまり、山村にとつての〈屋根裏〉は、埃っぽくて薄暗い空間であると同時に、常子への妄想を自由に駆動させることのできる妄想の領域でもある。語り手は、常子が部屋のなかにいるときには〈屋根裏〉と呼び、彼女が不在のときには「二階」と呼ぶが、それはまさに山村の妄想のありように対応しているのである。

ある日、自分の部屋から隣の部屋に「げじく」が逃げて行ったという嘘をついた山村は、彼女の部屋に入り込んで室内を物色する。部屋の隅に『女学校講義録』が積み重ねられているのを目敏く見

つけるが、すぐに「行李からはみ出してゐる赤いメリンスの布切」に視線を移し、「私、恐いわ、」と言いながら身を寄せてくる常子の「真黒な髪」に微かな匂いを感じる。「その細い頸と襟足をむさばるやうに見詰めて」いるうち、「次第に胸の中が沸騰して来るのを覚える。語り手はその欲情を「内からともすると溢れさうになる暴力」と表現している。

こうした伏線を与えたうえで、語り手は常子という人物の素性に迫っていく。常子は自分の来歴について、「小学校を卒業して」「補習教育も受けた」が、「風儀の悪い町の寄宿舎に入ること」を、父親が厳格で許さなかつた」ため、「せめて裁縫女学校にでも通ひた<sup>(4)</sup>」<sup>(4)</sup> と思ひ「父親には内所で」赤野のもとに來たと述べている。赤野との関係を伏せていた常子が、山村に対してどこまで本当のことを語っているかは分からないが、少なくとも、これらの言説が自らの境遇を隠しつつ赤野の許に棲みついていることの理由付けとして説得力をもっていることは確かである。

また、学校に行けなかつた常子は『女学校講義録』や『婦人公論』を読んで教養を身に着けたと語られるが、それは作品内において夜な夜な「習字」の練習をしている赤野の姿とも重なりながら怠惰な山村の生活を逆照射する。「貧乏人の私生児」として生れたにも拘わらず、「金持に学資を支給せられて」中学を卒業して新聞記者という職を得た山村が、ろくに書物も読まず、いかげんな態度で仕事をしている姿とは真逆の向上心を浮き彫りにしている。

こうして二人きりの時間を持つことができた山村は、「私、どうしたらいいでせう、本当に、」と溜息をつく彼女を心配する素



振りを見せながら、「私だつて何も出来ない男ですが、出来るだけの事は何でも致します」と語り、徐々に常子の心を引き寄せていく。自分は「優しい心」を持ちながら、誰からも愛されずに孤立して生きてきたなどと言って同情を買おうとする。注目したいのは、その場面における常子の変化である。山村の部屋で二人きりになったときの様子は以下のような描写とともに始まる。

山村は急にいそ／＼として、薄つぺらな座蒲団をすゝめたりした、机の前の窓を開けたりした、窓からはやつぱり黒い煙を吐き出してゐる工場の煙突が、そして青く光つた海が見渡せるのである。／＼「まあ、此方は本当にいい眺めですこと、」と常子は云つた。「それに明るいお部屋ですね。……あら、海が見えるぢやありませんか？」

山村が窓の外に見る光景は、一方で「海が見渡せる」ような広さをもっているが、同時に「大きな工場」の「大煙突」から出る「真黒な煙」も混じり込んでゐる。それは、「踊るやうなわく／＼した心に、何とも一種説明し難い、ちぐはぐな感じ」を与へるものである。だが、常子の視界にはそうした夾雑物がいつさい入らず、明るく美しい海だけが切り取られる。また、親しく会話を重ねるうちに、お互いが雄弁になつていくことを確認したあとの場面には、

——彼女はどうしたのか段々萎れて行くやうに見えた。彼女は又しても、相手の話などに全く無関心であるやうに、ぼん

やりと海の方に眺め入つたり、何か外の事を考へるやうに、自分の部屋との境界であるところの、煤けた襖をかへり見たりした。が、その間に一つ山村を喜ばせた事は、ふと、山村の長物語の途中で、彼女がつつましく欠伸をしたのは悪かつたが、それを機会に、片手を後の方で畳に突いて、従つて坐つた体を心もち斜めに反らせたから、膝をくづしたことであつた、一口に言ふと、彼女の態度が非常に固苦しくなつたのであつた。

という描写があり、物憂げな表情で山村を不安に陥れる女の媚態が表出している。ここでの常子は、「ぼんやりと海の方に眺め入つた」あと、自分の部屋と山村の部屋の「境界」である「襖」を凝視している。自分の部屋からは見ることでできない「海」が未来への希望だとすれば、それに続く「襖」は、新しい未来を切り拓くために跳び越えなければならぬ境界である。語り手は彼女の視線を通してそれを表現したうえで、しどけなく膝をくずしながら山村に心を開いていく様子を捉えるのである。

こうした境界としての「襖」に注目してみると、荒物屋の二階に並んでいる二つの部屋が決定的に区別して描写されていることに気づく。たとえば、山村は作品の最初から最後まで赤野と常子の住む部屋に立ち入ろうとしない。誰もいないと思つて襖を開けたときですら、「襖」のところから首を出して向こう側を覗き見るだけである。また、二人が親しく言葉を交わすようになってからも山村が常子たちの部屋に足を踏み入れたという記述は殆どない。唯一、常子と赤野の関係を問ひ糾そうとした山村が常子を「引

張つて」「自分の部屋」に連れて来る場面はあるが、それは常子  
をこちら側に引き摺り出そうとする行為であり、山村が常子の部  
屋に居座ったわけではない。二人が深い関係になつてからは、い  
つも「入らつしやい」という言葉に迎えられて常子が山村の部屋  
に入つてくるように描かれている。

その意味で、〈屋根裏〉は二重底の構造を持つてゐる。新聞記  
者として外の世界に生きる山村が帰つてくる自室もまた〈屋根  
裏〉のひとつには違いないが、そこは「海」を見ることができ  
る。「此方」であり、赤野と常子が住むのは山村の部屋よりも「もつ  
と汚くて、もつと惨め」な〈屋根裏〉の「其方」である。山村は  
都合のよいつきだけ「其方」から常子を「此方」に連れ出し、欲  
望が充たされたあとは再び「其方」に彼女を押し返す。けつして  
二人で外の世界に出かけようとはしないし、新聞記者としての自  
分に関わる人々に彼女を会わせようともしない。「いい眺め」が  
約束されている山村の部屋は、明らかに常子たちのそれとは違つ  
た空間として描出されているのである。

#### 4 〈屋根裏〉だけで成立する恋

「もう一歩だ」と思つて相手の表情を窺つていた山村は、常子  
のなかに「暗い影」が射し込んでいることに焦燥を感じて気持ち  
が萎えてしまふが、彼女はそんな山村に向けて「どうか赤野の前  
では、何も知らぬ顔をしてゐて下さいね。今日お話ししました事な  
ども、……」と懇願する。誰にも言えない二人だけの秘密を共有  
することで、逆に山村の心を手玉に取る。常子が帰つたあと、ひ

とり部屋に取り残された山村は、心のなかで「秘密、々々」と  
喝采し、「愚かしさうに崩れてゐるに違ひない自分の顔」を想像  
するのである。

ところで、この章の末尾で語り手は山村が常子をもてなすため  
に頼んだ鯨に焦点をあて、「そこには食べ残りの鯨が、煙草の灰  
にまみれて転がつてゐた」という一節を書き加えているが、それ  
は二人の行く末を暗示する予兆として機能している。ここでの  
「鯨」には、手に入れたいと欲情しているときには殊更に美しく  
見えた相手が、いったん自分のものになつてしまつたらまらない  
ものに見えてしまふ「恋」のカラクリが含蓄されている。誘惑者  
である山村が身銭を切つて買った「鯨」は、常子とのあいだに秘  
密の共有が完成した途端、「煙草の灰にまみれ」た「食べ残り」  
となつてしまふのである。

常子との関係が親密になるに従つて、山村は以前にも増して仕  
事に身が入らなくなつていく。山村は、ときに「快活で馴々し  
く迫つてくるかと思えば、ときに「他所々しく振舞ふ」常子に  
翻弄されていくのである。折しも、彼が記事を書いていた労働者  
が怠業をするといつて騒ぎ出す事件が起こり、彼は取材のため工  
場を訪れるのだが、普段からいい加減な記事ばかり書いていた彼  
は「昨日の記事は何だ、まるで会社側に買収されてるやうぢやな  
いか？」と言ひ寄られてしまふ。

怒り狂う労働者の群れからやつとのことで逃げた山村は、「自  
分のやうなもの、慰めてくれる人は、常子のやうな女性でなけ  
ればならぬ」と思ひ詰め、涙を流しながら、いつもの口癖である  
「優しい心を持ちながら……」という文句を口ずさむ。「もつと



学問のある、そしてもつと美しい娘」が現れるまでは、「うつかり恋杯を打明けない方がいゝかも知れない」などと逡巡しつつ、彼女のなまめかしい媚態に惹きつけられていくのである。

全身を震わせながら常子への思いを伝え、「立入つた企て」をしようとする山村に対して、彼女は少しも抵抗せず、「あなたは屹度、途中で私見たいなものはお厭になるでせう、私、屹度捨てられるに違ひないんですもの。……捨てられたら、私は又どんな不仕合せを見るか知れません。」と答える。その素振りをみて「あなたは……あなたは、初恋ぢやないんですね！」と叫ぶ山村に、呻くように「済みません、済みません……」と謝り続ける。

彼女が「処女」ではないことを悟つた山村は、心のなかで「……何といふ不幸な恋だ！」と叫び、「残酷」な運命を呪いたい気持ちになる。だが、ここで注目しなければならないのは、「しょぼりと俯向いて坐つてゐる」常子を「醜悪」に思いつつ、彼のなかにそれとは真逆の感情が芽生えていることである。このとき、語り手は山村の内面を「彼女が汚れてゐようと、又どんなに値打のない女であらうとも、一度心の奥に擱んだ女を手離すことは、そしていつ又別の女が得られようかと思ふと、それは堪へられない苦痛に違ひなかつた。」と描写する。彼は、常子の過去を不問に付すのではなく、むしろ、「値打のない女」であるからこそ「燃え上つた情熱」を好きなようにぶつけることができるのではないかという打算のもとで常子を自分のものにするのである。

やがて二人は日常的に肉体関係をもつようになり、山村は常子に慰撫されることで「浮世」の苦しみを忘れようとする。語り手は二人の情事を描写したりはせず、「唯一つ確なことは、彼女が

情事に於いては、特に大人であることだつた。」とだけ記す。ここの山村は、明らかに常子の性の虜になり下がっている。彼女がひとたび「憂鬱」な表情を見せれば、「あなたは、以前の恋人のことを考へてゐるんですね？」と嫉妬し、お互いを「何か深い秘密で隔てゝゐる」境界に気づかさざれば、それを「神秘的な魅力」と受け止めてしまうような心性が彼のなかで駆動し始める。自分がどんなことをしても「彼女の心が決して自分から離れないといふ確證」を得るまで常子を虐げなければ気が済まなくなっていく。ときには「あなたの先の恋人といふのは、一体どういふ人なんです、結婚してゐたんですか?……」などと詰問し、常子が泣き出すのを嗜虐的に見つめたりもする。彼はいつの間にか「優しい心」を見失ひ、常子を苛め抜くことでしか愛せない関係に陥っていくのである。

こうした束縛がより強くなるのは、常子が外の世界と関わろうとする場面においてである。彼女が母親に手紙を書くこととしているときも、階下の女房と話し込んでいるときも、なぜか山村はその姿に苛立ちを覚えてゐる。二人が別れるきつかけとなつた日も、常子は珍しく赤野とともに面白い物に出掛けている。常子を「屋根裏」の中で可愛がることに悦びを感じる山村にとって、彼女が外に出かけたり外とつながつたりすることは、少しも面白いことではないのである。

だが、この作品は後半部分において更なる展開を見せる。——ある日、常子との情交に身も心も擦り減り「神経の尖つて行くのを感じた」山村が、早々と布団に入つて身体を休めようとしていたところ、彼の耳に隣室の話し声が聞こえてくる。兄妹が「俺の事

でも話しはしないか」と思った山村は、「そつと隣室との境目の襖の傍」に忍び寄り、襖に耳をあてる。すると、隣室から常子の囁きが聞こえてくる。

——彼ははつとして息が止まつたかと思つた、体中が出来るだけの細かい、早い震動をもつて震へ出した、畳に突いた両手が、そして両膝が砕けはしないかと思はれた。何といふ隣室の気配だつたらう？ 次の瞬間、彼は体中が恥で真赤になつたやうな気がした、突然喚き出したい気がした、何物かを、腹一ぱいの声で叱咤したい気がした、そして体の震へは少しも止まらなかつた。……／即ち、赤野と常子とは兄妹ではなかつたのである。／「あなた！」と彼の耳元で囁くのと、同じ常子の言葉！……

ここでの襖は、常子と自分を隔てる仕切りであると同時に、向こう側で繰り広げられている情事の気配を濃厚に漂わせる接点としても機能している。明かりや声は洩れてくるが相手の姿を直視することはできない襖は、まさに見えないことによつて妄想を掻き立てる装置に他ならないのである。

常子が初めから自分を騙していたことを知つた山村は、布団に潜り込んで「糞、獣め、獣め！」「獣め、許すものか、許すものか！」と叫び続けるが、やがていつもの嗜虐的な気持ちを取り戻すと、「覚えてゐやがれ、明日、赤野が出て行つた後で、常子を引きずり倒して、この世の中の一番侮辱の言葉を浴びせ掛けてやるぞ」と思うようになる。「彼女を切々に粉砕」したいという衝

動と自分の怒りに見合うだけの「慰め」を期待する心が交錯する。山村は、ここでも「苛め」ることと「慰め」を受けることの等価交換を期待するのである。

翌日、暴力的な態度で詰め寄つて赤野との関係を問い糾した山村に対して、常子は落ち着き払つた態度で「夫婦ぢやありません、又恋でもありません」と答える。そして、覚悟を決めたかのように、「私の身分は、戸籍謄本を見て下されば、そして少し調べたら分るんですから……え、どうせ遅かれ早かれ、あなたに捨てられるのは分つてゐたんです」と語り始める。ただし、この作品では、常子の境遇が直接話法ではなく語り手による間接話法で示される。彼女の「途切れ途切れ」の言葉は、語り手によつて要約されたかたちで読者のもとに届けられるのである。

——彼女は穢多なのであつた、どうして相当な農家に生れた赤野が、ふとしたことから彼女と関係して、そして後悔したか、その為に彼が故郷を出奔しなければならなかつたか、又大きな屠牛場の持主で、金持である家の娘でありながら、常子は好いても居なかつた赤野とそんな事になつたか——實際、彼女は少しも赤野を愛してはゐないのだが、さういふ呪はれた種族の娘に生れたといふだけで、そんな男の出来心に縋つても、さういふ呪はれた身分から逃れたかつたのであつた、して見ると、恐らく穢多の娘であるといふ運命から脱け出したいと彼女が一所懸命に願ふ限り、そしてそれが彼女の両親たちが彼女の為に望むところである限り、彼女は何処までも、地球の果までも、赤野の一旦の過ちを種にして、彼

にしがみ付いて行かなければならないといふのであつた。

先にも述べたように、ここに記された事柄は、必ずしも「穢多」の実態を赤裸々に描き出そうとして書かれてはいるわけではない。日本社会における被差別部落を批判したり過酷な境遇に育った彼女に安易な同情を寄せたりする文面でもない。常子が山村に語つた言葉をそのまま記すのではなく、語り手の言葉として読者に説明するような書き方がなされたのも、そうした過剰な身振りを抑制するためだろう。

だが、故郷を「出奔」しなければ「呪はれた身分」から逃れることができなかった彼女が、どのような思いで赤野にしがみ付いてきたのかを想像することはできる。「呪はれた身分」から抜け出すために自分の身体を赤野に与えてきた彼女の強靱な意思を感じ取ることもできる。常子にとつての媚態とは、まさに自分が生き延びていくために習得した技巧だったのである。

こうして、「屋根裏」という比喩は山村の妄想世界であると同時に日本社会の暗部の表象ともなる。常子は山村に妄想される主体であると同時に、「穢多」と呼ばれる人々が担わされてきた過酷な現実を一身に引き受ける存在として〈屋根裏〉に棲息し続けるのである。山村はそんな常子とともに〈屋根裏〉を享受したがっている。赤野のように常子を引き受けたいのではなく、「屋根裏」の外に広がる世界に生きながら、時々自分が必要としたときだけ〈屋根裏〉を訪れ、その甘い蜜を味わいたいと考えている。彼はまさに誰にも知られることなく〈屋根裏〉の内と外を往還する存在になりたがっているのである。

ところで、「屋根裏の恋人」をここまで読み進めてきた読者は、作品の冒頭部分で「煙草の煙と、埃とが一つになつて、もや／＼と部屋のなかに立ちこめてゐる」カフエーに身を置いた山村が、我々は「どんな女をでも恋することが出来る」と考えていたことを思い出すのではないだろうか。このとき山村は、「恋」の相手は「女学生か、人妻か、未亡人か、商売女か、或ひは黒んぼか」と眩き、ありとあらゆる女がその対象になり得ると考えている。だが、ここに常子のような境遇の女は登場しない。その意味で、常子の告白は山村がそれまでの人生のなかで蓄積してきた経験がまったく役に立たない想定外のものだったといえる。逆にいえば、想像することすら叶わない過酷な現実が根深く張り巡らされているのである。

## 5 終わることのない〈屋根裏〉の世界

常子の告白を聞かされた山村は、再び「気の抜けた人のやうな状態」で新聞記者生活を続ける。つい二三日前まで「慰め合つたり、いがみ合つたり」してきたことが嘘のように、彼女を避ける日々が続く。だが、そんな山村を置き去りにするかのようには、「けろりとした顔」で下の女房との無駄話に興じる。隣室にいる彼女の「吐息」まで「はつきりと記憶の中に目覚めて来る」ような気がした山村は、心のなかで「あんな女、もうあんな女に拘り合つてはならない」と叫びながら彼女の記憶を頭の外に追い出そうとする。

だが、そんな抵抗も虚しく、常子の「幻想」は「昔より一層複

雑な魅力を加へ」ながら山村を襲撃する。山村は「いつその事、此方も相手の弱点につけ込んで、彼女を散々に弄んでやらうか？」と考えたりもするのである。

ところで、この作品における山村の行動パターンは同じことの繰り返しとして描かれていることが分かる。たとえば、山村は、夜遅くまで眠れない↓寝坊する↓警察署行きを怠ける↓他社の新聞を確認するまでの不安↓安堵↓退勤↓妄想↓夜遅くまで眠れないという悪循環の生活を送っている。常子との関係性においても、山村が常子を問い詰める↓常子が泣いて山村も泣く↓再び常子への思いが甦るといふパターンの繰り返しである。

さらに、こうした反復性は表現のレベルにも影響を与えている。作品内には同じ言葉を二度繰り返すリフレインが多用されているのだ。「いけません、いけません」、「いけない、いけない」、「恋がない、あゝ、恋がない」、「面白いですね、それは面白い」といった具合にある。また、地の文では「いろく」、「もやく」、「ぐづく」、「ガンガラく」といった踊り字が頻出する。同じことを繰り返し続けるモチーフがこの作品にはあるのだ。そして、それは山村の人間性の象徴でもある。彼はある意味、学習しない主人公として作品内に君臨しているともいえるのである。そんな山村の愚昧さを鮮やかに裏付けるかのように、作品のラストシーンには次のような描写がある。

——ああ、いけない、いけない、とそこで彼は又激しく頭を振つて、決心したやうに立上つて、出勤する為に入から洋服を出してゐる時、隣室から常子のわざとらしい咳払いの声

が聞えて来た。すると、忽ち彼は合図を聞いた恋人のやうに立上つた。そしてこれは彼の所謂優しい心がさうさせるのか、それとも棄鉢な心がさうさせるのか、それは彼自身にも分らなかつた、何故と云つて、「いけない、いけない！」と彼は口の中で呟きながら、いつの間にか彼の足は境の襖の方に歩いて行つて、彼の手はその襖の引手に掛つてゐたのであつた。

……

常子を嫌いになつてしまいたいと思いつつ、彼女との濃密な関係を忘れることができない山村は、またしても煩悶している。「ああ、いけない、いけない」と頭を振つてみても、彼女の幻影を追い出すことができていない。一方の常子は、自分に未練をもっている山村が再び襖に手を掛けることを予測しているかのように「わざとらしい咳払い」をする。かつて、自分の頭のなかに妄想としての〈屋根裏〉を構築し、常子を都合よく扱おうとしていた山村の面影はもうどこにもない。二人の関係性は鮮やかに反転し、山村が常子呼び寄せるのではなく、むしろ山村が常子の待つ〈屋根裏〉に吸ひ寄せられていくかのように描かれている。こうして彼は禁断の扉であつたはずの「襖」に手を掛け、〈屋根裏〉の境界を見失うのである。

#### 注

- (1) 堀木克三「今月の創作界(四)」〔時事新報〕大正十一年二月五日
- (2) 藤森淳三「新年の文壇(三)」〔国民新聞〕大正十一年一月

三日)

(3) 逸平「批評 我国文壇の光榮 宇野——芥川——室生」(『種蒔く人』、種蒔き社、大正十一年二月)

(4) 作者・宇野浩二は「国境の峠に濺ぐ涙の雨」(『少女の友』大正四年八月、のち「国境の峠に泣く」と改題)にも、父親の許しが得られなかったために町の学校に行けなかった「穢多」の娘・おときを登場させている。村の尋常小学校を出た後、「他所の、立派な村」にある高等小学校に親の反対を押し切って進学したおときは、「穢多の娘」と指さし、て聞こえよがしに嘲られる」など、辛い目に遭う。

※

本論には不適切な表現が含まれるが、作品の舞台となった時代の社会背景を知るための重要な手がかりであるとともに、本文を読み解くための鍵になる表現であるため、原文をそのまま引用している。

(うさがわ かなこ) 本学文学部文学科日本文学専修)